

「賛美せずにはられない」

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6

July.4.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6 (パウロ)

Preface

エペソ書を主日礼拝で見るようになってから 3 回目になりましたが、身も蓋もない話をしますと、エペソ書に記されている内容は、到底人間の言葉では表現しきれないものについて記録しています。

頭脳明晰、博学多才だけでなく、酸いも甘いも噛み分けた人生経験豊富な使徒パウロでさえも、言い尽くすことなんかとても出来ないようなことをパウロは聖霊に促されて、何とか人の言葉で言い表そうと努め書き記したのが、エペソ書です。

そしてその、とても言葉では言い尽くすことが出来ないこととは、私たちが毎週のように耳にする十字架による罪の贖い、罪赦された者たちの成長と成熟、そして罪赦され、キリストの身丈にまで達する栄光へと入れられた聖徒たちが受け継ぐ御国のことなどですが、

これらのことを私たち人間側の疑問や質問に答えるという視点ではなく、神様がどう準備され、神様がどのように計画し、また神様がどのように実践されたのか、そして今も実践しておられるのかという神側の視点に立って書こうと努めているので、どんなに言葉があっても足りないですし、言い尽くすことなんか到底出来ないようなものを書き記しているのがエペソ書なんです。

Part One

例えば、ヨハネの黙示録なんかも人間側の視点ではなく、神様側の視点で書かれた代表的な聖書のうちの一つと言えます。

ヨハネの黙示録は、目で見たいいけれども、その見たものを限りある人間の言葉で、到底言い表すことも、言い尽くすことも出来ないようなことを書き記しているので、分かりにくくてある意味当然なんです。

それでも何とか、出来る限りの表現力をすべて動員して書き記した書物がヨハネの黙示録です。

そして、この人間の言葉では、とてもとても言い尽くすことの出来ない神の御業について記しているエペソ書とヨハネの黙示録に共通しているのが、神をほめたたえる賛美です。

どんな言葉をもってしても、どんなものを総動員したとしても表現し尽くす

ことなんか出来ない、宇宙が壮大であることが比較にもならない程に壮大な神の愛を前にして、致し方なく、それしか方法がなくて、受けたものへの感動を表すのが賛美です。

神の愛に驚嘆し、神が成してくださった救いというすべての霊的祝福に驚きすぎて、神をほめたたえることしか出来ないんです。

これが賛美です。

ヨハネの黙示録を見ますと、御座に着いておられる父なる神と子羊イエス様を礼拝している天上の礼拝の様子が記録されていますが、そのすべての礼拝の内容が、父なる神と子羊イエスをほめたたえている賛美です。

何かの思いや願いを聞いていただく必要な一切ないほどの満足と感謝と喜びを体いっぱいを感じながら、成してくださった御業を覚えた時に、自然と出てくる唯一の反応が、神をほめたたえることです。

言葉で言い表すのも困難なご計画をお考えになった父なる神様と、
そのご計画を体を張って実行に移された御子イエス様と、
その成し遂げられた業を私たち罪人の内に確証づけてくださる聖霊なる神様の三位一体なる神様をほめたたえること、これが、エペソ書とヨハネの黙示録の共通点です。

Part Two

先程エペソ書 1：3－6 の御言葉を読みましたが、この御言葉をよく観察してみますと、前と後ろを一つの言葉によって挟まれていることが見えてきます。

それは、「ほめたたえる」という言葉です。

「神がほめたたえられますように」という言葉から 3 節が始まり、「神がほめたたえられるためです」という言葉をもって 6 節を閉じています。

つまり、賛美が、3 節から 6 節の御言葉を包んでるんです。

使徒パウロは、神が成してくださった救いの業の偉大さ、大きさ、緻密さ、豊かさ、愛情深さ、あり得なさ、驚嘆を覚える時に、どんな言葉をもってしても言い表すことの出来ない思いを、「神をほめたたえます」という賛美で表します。

与えてくださった恵みの栄光が凄すぎて、賛美しか出て来ないんです。

神を賛美する、ほめたたえるというのは、「完膚なきまでの降参、降伏、ギブアップ、それ以外やれるものはありません」という告白の現われですが、降参降伏ギブアップだからと言って、そこに屈辱感はありません。

むしろ、そこにあるのは、感謝と満足と安堵感と勝利です。
そこには、敗北感もなければ、不足感也没有せん。
ただそこにあるのは、充実感と満たされ感です。

人は、神がこんな自分のために成してくださった比類なき恵みがあるんだと悟った時、賛美を口にせずにはいられなくなります。

皆さんも、主イエス様を信じられるようになった時、何とも表現し難い感謝と感激と、また申し訳なさと共に涙が溢れながら、教会で、礼拝の中で賛美し、また日常の生活の中でも鼻歌を歌うように賛美している人たちの気持ちが理解出来るようになって、自らも神をほめたたえる賛美をしたくて仕方なかったような経験をされたことがお有りだと思います。

私自身初めて教会に行って、クリスチャンたちが賛美を歌う姿を見た時、「うわ、この人たち、やべ〜！ 頭の中を何かにやられてる」と思っていたのに、礼拝に出席するようになってから3ヶ月ぐらい経ちますと、OHPで写された賛美の歌詞を見て、突然、涙が出てきました。

その時は、何の涙なのかははっきり分かりませんでした。神をほめたたえる言葉に私の狭い知性とか、理性とか、経験を超えて、私の内なる霊が反応したのかもしれない。

それからひと月ほどたって、御言葉と祈りによって、はっきりとイエス様を信じたいと思えてからは、神をほめたたえる賛美がしたくてしたくたまらなくなりました。

そんな自分の姿に、もうびっくりです。

一日中賛美が聞きたくて、歌いたくて仕方ありませんでした。

履歴書や自己紹介の趣味の欄に、賛美と書くほどでした。

賛美する時の気持ちは、賛美というジャンルのキリスト教音楽に陶醉しているのではなく、神様が成してくださった事、与えてくださった恵みを前にした感謝、感動、希望、光、真理、良いと言われるものすべてを並べても表現し尽くせない充実感と満足感と、大丈夫だという平安です。

聖書の言う賛美とは、音楽に合わせて歌う賛美のことも賛美と言いますが、音楽に合わせてただ何となく、機械的に讃美歌やプレイズソングの歌詞を口ずさむことではなく、神様に真剣に向き合った時、出てくる感謝と喜びと満足を表すことを賛美と言います。

エペソ書を書き始めたパウロは今、神様が成し、与えてくださったものを思うと、賛美を口にせずにはいられませんでした。

口にするどころか、口にする前から、頭の中で思い描いただけでも、圧倒されるほどの感動と感謝と喜びで、胸いっぱいになって、本論に入る前に「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように」という言葉を、まず口にせずにはいられません。
そして、賛美の根拠となる内容説明に入っていきます。

さらに、その内容のすべてを語り終えるまでもなく、二言三言口にただけでも、もう「神をほめたたえます」という言葉を口にせずにはいられないぐらいの感謝と感動と満足感に包まれます。

これが今、3節と6節というたった3節という短い文章に込められたパウロの気持ち、感情です。

何て幸いなことかなと思います！

父なる神様が、イエス・キリストにあってなしてくださったことを考え、口に
するだけでも、こんなにも感動が心を満たすんです。

Part Three

では、何がパウロを、こんなにも賛美せずにはいられなくしたのでしょうか？
3節です。

エペソ人への手紙1：3（パウロ）

神様は、キリストにあって、神が与えることの出来る最大限、もうこれ以上ないすべての霊的祝福をもって、私たちを祝福してくださいました。
いつですか？

エペソ人への手紙1：4－5（パウロ）

神様は私たちを、イエス・キリストによってご自分の子にしようとお決めになりましたが、いつお決めになりましたか？

創世記1章1節以前です。

つまり、世界の基が置かれる前から、天地万物が創造される前から、もう既にお決めになっておられました。

言葉にはしていますが、到底分かりえない時間と空間の話です。
そんな分かりえない時間と空間の概念以前から、お決めになっておられました。

では具体的に、神様が、私たちをご自分の子にしようとして、天地万物を創造される前にお決めになったとはどういう意味でしょうか？

何者をも、何をもってしても、私たちを神のお子とする、神のご決心を妨害できるものは何一つないということです。

もっと正確に言いますと、私たちの馬鹿げた、愚かで、ふしだらで、無知で、汚れていて、腐っていて、反抗していたすべての罪と悪が、私という人が神のお子とされることを妨害することも出来なければ、邪魔立てすることも出来ないということです。

まことの光であられるキリストが世に来て、そのまことの光を認識することなんか全くもって出来ず、

その光を避けて暗闇に自ら好んで進んで行き、

天地万物をお造りになった創造主であられるイエス・キリストを無惨にも高笑いしながら、

または冷酷な無表情で十字架に架けてしまうような悪人、悪党、悪者、罪人である私たちの行いをもってしても、決して、

神様の喜びから発している全き善であり義である救いの業が、爪の先ほども妨げられることもなく、取り消されることもなかったということです。

どんな悪行、不道德、不正、罪過も、私たちに対する神の愛を止めることは出来ません。

パウロはローマ書やテモテ書で、自分自身のことを「私は本当にみじめな人間で、罪人のかしらです。誰がこんなみじめで、罪人のかしらのような人間を救い出してくれるのでしょうか」と言う程に、自分の罪を認識していましたが、そのどんな罪も、彼を神の子とせしめることを妨げ、妨害し、邪魔立てすることなんか出来ませんでした。

パウロを我が子とする神の喜びが、どんなものをも凌駕し、どんなものをも打ち破り、どんなものをも突き破って、神はパウロを我が子としました。

誰にあってですか？

キリストにあってですね。

Part Four

神様は、私たちを「世界の基の置かれる前から、キリストにあって選び、聖なる傷のないご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めて」おられました。

私たちを、聖なる傷のないご自分の子にするために、神様は、キリストを十字架に架けるという犠牲を払われたわけです。

ローマ人への手紙 5 : 8 (パウロ)

神様は、いつ、私たちを愛したと言っていますか？

「私たちがまだ罪人であったとき」です。

「私たちがまだ罪人であったとき」とは、

私たちが神様に対する好意を持つ前、神様が実際におられるということを知る前、神様がダメだと言うにもかかわらず逃げまどっていた時です。

そんな時に、神様は私たちに対する愛を明らかにし、罪を洗い流し、ご自分の子とするために、イエス・キリストを送り、血を流されました。

イスラエルヘブル文化にあって子とは、親とは違う存在であることを意味したり、決して越えることの出来ない親と子の権威の違いを意味せず、「同じ」ということを意味します。

つまり、子というのは、親そのものです。

3週間ほど前、我が家の三男雅論が夜中に鼻血を出して、洗面所に行って顔を洗ったのですが、朝起きて洗面所に行ってみますと、その床に2滴ほど息子の鼻血が落ちて固まっていました。

それを見た時、瞬間湧き上がってきた思いが、想像もしなかったものでした。「もったいない！　かわいい我が子の流す血は一滴でも勿体ない！」という思いでした。

この突然湧き出てきた感情が、一瞬にして色々なこと連想させました。

「親ならば、子が痛んでいる時、それでよくなるならば肝臓でも、腎臓でも、目ん玉でもほじくり返して、すべてをあげたいと思うのが親なんだ！

父なる神様は、我が子イエス様の血一滴さえも惜しいはずなのに、茨の冠で頭も顔も血だらけにし、獣の牙がはめ込まれたむちで血みどろになるまでむち打たれ、十字架で血まみれになりながら死なせるほどに、こんな僕を、私たちを神様は愛してくださっているんだ・・・」ということが、一瞬にして頭の中を巡り、胸が熱くなりました。

神様は、神様が私たちの唯一無二の父であることを、私たちに教え、諭し、知り、認識させることを、世界の基が据えられる前から、もうすでにお決めになっていた。

そんな神様の私たちに対する喜びは、何ものをも妨害できません。

何もかも飛び越え、乗り越え、耐え忍び、私たちのもとに来られました。

この神の愛に、パウロは賛美せずにはいられないんです。

賛美することしか出来ないんです。

このような神の愛が、私たちにとって何で重要かと言いますと、私たちが自ら勝手に失望し、絶望し、神を見失ってしまうからです。

私たちの信仰生活における失望や落胆は、いつもこんな感じです。

「私が信仰生活をそれなりに順調に送れている時は、神様も私方を見てくださるけれども、信仰生活をよく送れていないと感じる時には、神様も私たちの方を見てはくれず、背を向けておられる」と思い、自ら勝手に失望し、落胆します。

でも、そんなことは決してありません。

私たちが勝手に、あっち行ったり、こっち行ったり、くっ付いたり、逃げたり、怒ったり、沈んだりしているだけで、神様はいつでも、今も、今日も明日も、永遠にお変わりなく、私たちの方を向いておられます。

寄り添ってくださっています。

父なる神様は、キリストにあって、喜びと愛と慈しみと、到底推し量ることなんか決して出来ない、言葉で言い尽くし得ない恵みをもって、私たちに接し、向かい合ってください。

私たちの失望や落胆は、「もっと良くやれると思っていたけれども、意外とやれなかった」という思いに起因します。

つまり、私たちが私たち自身に落第点を付けたから、当然、神様も私に落第点を付けると言うことが、失望や落胆に繋がります。

でも、そんなことは決してありません。

もちろん、私たちをより良く導くために、道を逸れたところから真つ当なところへと導くために、お灸を据えることはありますが、神様が一度ご自分の子とした私たちに、落第を、失格を宣告することはありません。

こう言いますと、ローマ書にも出てきますが、必ずこんな質問が出てきます。「じゃあ、好き勝手に、好き放題しながら生きてもいいんですね？」という質問です。

そんな質問に対する答えとして聖書が語るのは、

「私たちは、罪の奴隷という滅びから脱し、義の奴隷という、神の奴隷という永遠の栄光へ続く道を、信仰的責任をもってしっかり生きることが求められているし、そう生きたいと願い、聖霊なる神様によってそう生きようになる」と言います。

残念ながら、ともすると私たちの底深い罪のマグマを噴き出させようとする
私たちがこの地上で生きていく時には、何かしらの奴隷として生きて行くこと
になります。

嫌でも、私たちの内に住み着いている罪が、世に蔓延っている罪に反応して、
何かしらの奴隷として生きて行くことは避けられません。

お金の奴隷、時間の奴隷、人の奴隷、力の奴隷、知識の奴隷、快樂の奴隷、ス
テータスの奴隷、組織の奴隷、社会構造の奴隷、趣味の奴隷と何かしらの奴隷と
して生きて行くことになりますが、しかし、そのどの奴隷をも貫き通して、栄光
へと続く道が、神の奴隷であり、義の奴隷です。

エペソ 6 章を見ますと、実際に、人の奴隷として生きていた奴隷の身分のクリ
スチャンたちに対して、パウロは、「奴隷は奴隷としてしっかりその責任を果た
し、キリストの僕として、心から神のみこころを行いなさい」とアドバイスしま
す。

世の中の奴隷でいることに安住するのではなくて、世のすべての奴隷の身分
を貫き通して、キリストの僕として生きて行くこと、これが私たちに課せられた
神からの信仰的責任です。

ただ、この信仰的責任を全うしたいと生きていても、必ず、失望することがあ
ります。

しかし、神様はその私たちの失望に、決して同調なんかせず、なおも肯定し、
待っていてくださり、傷のない聖なる者へと変えるために着々とことを進めて
くださいます。

だから、パウロは感激し、神をほめたたえずにはいられないのです。

Part Six

詩篇 5 1 篇を見ますと、ダビデが忠臣ウリヤを殺し、その妻バテシェバとの姦
淫の罪を犯した後に、涙をもって悔いた言葉が記録されています。

ダビデは、絶望しました。

国民や臣下や周りの国々からも、素晴らしい、敬虔深い王だと称賛され、自ら
も「これぐらいならば、立派な王だし、神を信じる者としても立派だ」と思える
ほどでしたが、そんな自分が、沸き立つ淫らな欲望を抑えることも出来ず、人を
殺してまでその欲望を正当化し、隠蔽しようとした自分自身に絶望しました。

そして、その絶望の中で、とても大事なことを悟ります。

真っ暗闇の中にあっても、変わらずに灯し続けられている光があり、その光が
暗闇を追い散らしてくれるような体験をしました。

「それでもなお主は、私のことを赦し、愛し、霊を新しくしてくださる。」

どんな絶望の中にあっても、神様が変わらず共にいてくださり、神様が真に望んでおられることは、砕かれた霊、打ち砕かれた心だということをそこで知ります。

詩篇 51 : 17 (パウロ)

私たち自身が、私たち自身に失望し、絶望しても、神様は絶望されません。

私たちの、絶望の内に砕かれたたましい、打ち砕かれた心を馬鹿にし、見下げのようなこともなさいません。

むしろ、その砕かれたたましいと打ち砕かれた心をもって、神様は、神様が成し遂げようとされていることを、成し遂げられます。

即ち、神の前に聖なる、傷のないご自分の子とすることを、必ずや成し遂げられます。

だから、自暴自棄になっても、絶望しても、失望しても、終わりではありません。

それをも、神様は、喜びと愛と慈しみと哀れみをもって、私たちの方を向き続けてくださいます。

そんな私たちが、何があっても忘れてはならないことは、この事です。

ローマ人への手紙 8 : 31 - 32 (パウロ)

天上にあるすべての霊的祝福をもって、私たちを栄光の座へと就けるとおっしゃり、その神の目標に到達する運命に私たちは、すでに入れられています。

だから、私たちのやることなすことをもって人生を評価し、右往左往するのではなく、

神が神であられること、その方の力、その方の恵み、私たちに対する喜びと愛と慈しみと哀れみと根拠にして、与えられた人生を生きてください。

Conclusion

父なる神様は、悔い改めたこともなく、先に神様に助けを求めたことなんかもなく、罰を受けて当然、死んで当然、滅びて当然、神の怒りに燃やし尽くされて当然の私たちを、悔い改めさせ、救い、神の元へと戻してくださいました。

そして、どこまで連れていくかと言いますと、神様が納得し満足されるまで、私たちを導いて行かれます。

だからいつでも、神様の元へと戻ってきてください。

上手くやれたら戻るとか、上手くやれるようになったら戻るとか言わずに、今あるその姿で、そのボロボロの姿で十分ですから、神様の元へと戻ってください。

豚のえさを食べるほどに落ちぶれた放蕩息子を今か今かと、毎日、外で1日中待っていたあのお父さんのように、今も、神様は待っておられます。

いつでも待っておられます。

戻ってください。

戻るだけでいいんです。

「イエス様、今、私はあなたの元に戻りたいです。戻ってきました」と一言、口にするだけでいいんです。

そうしたら、変わらず、共にいてくださっていた父なる神、愛なるイエス様に気付き、賛美がおのずと口を突いて出てくるでしょう。

皆さんの歩みが、神に感謝したい、神を賛美したいという思いが基礎となって、どんな失敗があつたとしても、いつでも神のもとに帰る恵みあふれる歩みとなりますよう祈っています。

だから皆さんも、いつでも、神のもとへと戻ってください。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ人への手紙8：32